

IBM と共に

水田 眞一氏 講演

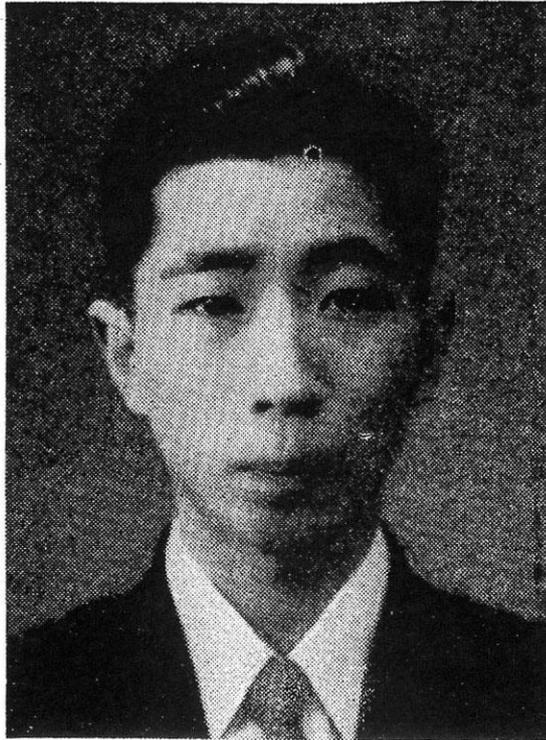
第 1 回 戦前から終戦直後まで

第 2 回 戦後から大阪万博まで

親鴨会 関西支部

この冊子は、2011年、2012年に開催されました親鴨会関西支部の総会時に前関西支部長の水田眞一氏に講演頂いたものを採録し文書化したものです。
日本IBMの草創期から大阪万博後までの歴史が語られています。

1950年の水田眞一氏
WTC ニュースで紹介



SHINICHI MIZUTA
Japan

Mr. Mizuta, who is a graduate of Kinjo Commercial School and Kobe University Extension, entered the Japanese IBM company in April, 1950, as a customer engineer in Osaka. He was made a sales representative in October, 1952.

I B Mと共に

第1回 戦前から終戦直後まで

2011年4月16日(土) 親鴨会関西支部総会—水田眞一氏 講演内容

先月大きな震災が起りましたが、私の知っている限りでは社員が亡くなったとかは聞いていませんが、幕張事業所が土地の関係か少しダメージを受けたように聞いています。このような時に、話をする機会を与えられたと言うか、話をしろと言われたということになってしまいましたが、今年の1月14日の新年会の時に、はじめて指定席に座らされて前にいた西野支部長の話にうんうんとうなずいたのがこんなことになってしまったのですが、これからは絶対に指定席には座らないことにしようと思っています。

先ほど IBM 創立100周年の記念ビデオを観まして、100年、1世紀ということになりますが、IBM の機械に会ったのが66年前で、ちょうど戦争中で敗色濃い中でしたが、私たち若い者はまだまだ日本は勝つと思っていました。

この頃、神戸大学、当時は神戸商業大学と言っていましたが、そこに在学していて、戦前から IBM の機械が入っていたのが IBM との関わりのはじめです。

山本五十六元帥が撃墜されたのやら、いろんなことが、IBM のパンチカードシステムで暗号解読されたのではないかと思われ、その対策のために帝国議会の勅令で特殊学級が発足したのが1944年4月で、その時の所長に H 教授がなられたのが、私の人生を変えてしまったことになりました。

それからどっぴりと IBM に浸かってしまうことになります。

先ほどの IBM 創立100周年記念ビデオで66年前くらいからの機械のことは大体わかります。

今日の話の中身はありませんので、ペーパーにしてお配りします。

3月26日の日経新聞に、今度の震災で IBM がどういう初動をしたかという*1 記事がでました。同じ日に、堺生まれの藤本儀一さんの記事があり、人災と天災というのがあり、天災とは今度の震災、人災とは戦争によって起きた悲劇、これは第二次世界大戦のことなどを言いますが、大和川を渡ろうとしたときにグラマンに襲われたことなどが書かれています。

66年前から今日まで、記憶は歳とともに忘却の彼方にいって、いっぱい飲むことだけが頭に残っています。

日本 IBM が発足した時は1950年ですが、私自身は日本 IBM の戦争中の会社に学生の委託生として入ったのが、1945年2月11日の紀元節の日で、神戸商業大学からの派遣で面接を受け、現在の日本生命本社の6F の機械室に9セットの会計機が並んでいて、その隣の部屋に戦時中にできた日本統計機株式会社という会社が、IBM 機械のメンテナンスにあたっていました。

そこに学生で社員になって、当時は3つくらいの顔を持っていましたが、月給をくれるというので行きました。また、大学からは特待生で授業料をただにしてくれたり、会社からは月給の半年分を報奨金としてやるというようなことで、その金は一杯飲むのに消えてしまいま

したが・・・。

日本 IBM が発足してから 25 周年の 1975 年に西日本と大阪に関して私が書いたもの*²をお配りします。そこには 1945 年の終戦を迎えた後から、IBM がスタートした 1950 年までのことが書かれています。

また、同じ年に日本工業新聞、IBM と付き合いのある業界紙ですが、その中に戦中、戦後からやってきて、25 年を迎え自社ビル（現 OSA）もできたということで、特集の記事が 40 回にわたって生まれ、そのうち 2 回は西日本の門出、そして大阪ということで、私がインタビューで話したことが掲載されました。2 枚目に配布したのがその*³記事です。

この辺のところ、内のこと、外のこととどんなことをしたかは読んで頂ければわかるかと思えます。

それから、年月がたちまして、IBM が 50 周年を迎えましたが、実は日本 IBM の歴史は少々ややこしいのです。

25 周年の時は、1950 年にスタートしてから 25 年たったところだったのですが、50 周年というのは、日本 IBM に IBM コーポレーションが 100%投資をしたのが、1937 年 6 月 17 日で、今日、この日が日本 IBM の創立記念日となっています。

おもしろいことに、中国 IBM も 1937 年にできています。1937 年は昭和でいうと昭和 12 年ですね。昭和 12 年 7 月 7 日に日本が中国で盧溝橋事件を起こしており、当時は北支戦争と呼ばれていて、そのうちずるずると支那事変という名に代わっていったのですが、その日から日本は完全に海外と戦端を開いたということになります。それまでも満州事変とか上海事変とかもありましたが、本当に中国と戦争をしたのは 1937 年の時です。

その時、中国には 7 月 7 日以前に会社を作ったが、日本 IBM は 6 月 17 日だったので、あと 20 日遅れていたら、日本 IBM の 100%の会社は設立できていなかったのです。

国の法律がガラッと変わり、外資 100%の会社は戦前 1 軒しかありませんでした。

唯一、1937 年 6 月 17 日に生まれた日本ワットソン統計機株式会社だけだったのです。

そこで、その時を起点として 50 年後の 1987 年に日本 IBM の社内誌ライフの 50 周年号が発行され、そこに私が書いたものがお配りした*⁴「西日本のお客さまとともに」です。大阪がスタートした頃の写真が載っていますが、今日総会に参加された方で若い頃の三津江さんやお若い脇さんが写っています。皆さん方にはどこにおられるかはわからないかも知れませんが。

依頼された終戦直後から 1987 年に私がリタイアする年までのお話をしましたが、この辺で私の話は終わりにしたいですが、まだ、時間があるようなので、ここからの話は思いつきでしますので、一切オフレコにして頂きたい。

私が最初、IBM の機械に出会ったのは神戸商業大学（現神戸大学）の経営機械化研究所で、3B(スリービー)統計機という機械だったと思うが、これはシニア・ワットソンが神戸商業大学に寄贈した、いうより永代貸与したというものです。当時、IBM はすべてレンタルで一切販売しないというシステムですとやってきた。

だから、IBMの古い社員の方たちは、IBMは売らないのだ、レンタルだということで育ってきた。ところがなぜ売らなくなったかという、独占禁止法で何回か訴えられたのですが、IBMは売らないからモノポライ(独占)していると言われるということで、和解に持っていかうと、1956年にIBMと米連邦取引委員会でConsent Agree(同意審決)をやって、IBMはレンタルも売りもやるようになった。

お客さまからIBMはなぜ売らないのだとよく言われましたが、レンタル商売というのは機械商売ではなく、お客様の用益を売るのでと言ってきた。システムセールとずっと言われているけれど、IBMは他のコンペティターと違って、値段が安い高いじゃない。たとえば、シオノギ製薬さんでは、月にいくら費用がかかって、この費用で仕事をしていくら儲かったか、お客様に儲けて頂くというのがレンタル商売の基本なのです。

IBMは決して物売りではなく、システムセリングで、システムの解析から設計などトータルでやり、その代価としてレンタル料を頂くのだと、若い時から教え込まれてきました。

IBMの最初のコンペティターはレミントンランドで、IBMのシステムはホレリス博士が開発したホレリス式、レミントンはパワース式という機械、神戸大学にはこの2つともありました。

IBMのワトソンが神戸商業大学に現物貸与したので、パワースも同じように寄付したのです。私が大学で最初に学んだのは、その時IBMに入るつもりはなかったのに、両方とも国策のつもりでやりました。

1944年4月の入学式は、単なる大学の入学式ではなく、いろんな特典をつけて、日本が勝つために何とか要員を集めて、向こうの暗号も解読できるようにしようとしたのでしょ。その時の入学式に政府の内閣統計局長官で、今の皇太子の弟君の妃の紀子様のおじい様であった方がスピーチをされた。大変控えめな人で、私の先生だったH教授はホラばかり吹くのでラッパ泰とか言われていましたが、紀子様のおじい様は訥々として、このような統計機はアメリカでは広く使われているのだよ、それに対処するためにあなた方は第一期生でやってもらうというようなことを話され、私も若かったので、なんとか日本が勝てるように頑張ろうと思ったこともありました。

1945年2月11日に、日本生命の6Fに行ってみて、大学にある機械と比べて新しいいいものがあつたので、そのまま帰ったらもったいないと思って、その場で残って頑張っていたら、面接をした常務のNという東芝から来た人がきて、日本統計機という会社は東芝を中心にして、日本生命とか第一生命とかの金融関係のお客様が出資をして100万円の資本金でできた会社だと教えてくれた。

その頃は日本生命の機械には木の札がかかってあつた。何が書いてあるかという、これらの機械はみんなアメリカの機械なので、略奪したらだめなので、札には敵国財産云々と書かれてあつた。いわゆる敵さんの管理資産だったのです。日本生命にあるのも日本統計機の資産ではなく、ワトソンから受けとった資産を預かって商売をしているのだよ、国家としてアメリカ資産はちゃんと守っていた。これを使って商売をなさうというように言っていました。

入社式が済んで、日生の屋上に上がって大阪の空をみたらきれいな空で、まだ戦災も受けていませんでした。

昭和20年2月11日の紀元節も終わって、3月13日にはじめて大阪に空襲がありました。

その時、阿倍野にいたが、夜には焼夷弾が落ちてきて大阪の街は火の海となった。

翌日、学生であったが日本統計機の正社員でもあったので、鉄兜をかぶって天王寺駅まででたら、今の近鉄百貨店、当時の大鉄百貨店の窓から煙がもくもくと出ていた。建物は残っていたが窓から焼夷弾が入ったのでしょう。

地下鉄が動いていたので、淀屋橋まで行き、日生の6Fに上がってみたら被害なくほっとしました。

今の住友銀行本店のビルが、当時、住友グループの本社で、その中で唯一IBMの機械を持っていたのが住友生命で、住友本社の屋上に機械室だけを作って住生の機械を置いていました。

(24:27)

住友生命は平和産業なので、男子社員はみんな兵隊にとられて残っているのは女性ばかり。

空襲を受けた後の3月14日朝、お客様の被害の状況を確認しに行ったら、日生OK、住生OK、シオノギ、タケダOKでした。

住金伸銅所が桜島にあったが、戦前はお客さまではありませんでした。ところがIBMの機械は軍が徴発するので、徴発されるくらいならということで住生の2セットのうち、古い方の1セットを同じ住友グループの住金伸銅所へ入れました。ここにも3月14日に行こうとしましたが、軍需工場のためか憲兵がいて行けませんでした。

戦争が終わってしばらくして機械を引き取って一時、住友本社ビルにある住生へ持ってきました。これはかなり戦争で爆風を受けて屋根が飛んでいたもので、大分雨水が入っていたが掃除したりして復旧させました。

武田製薬の十三工場から、昭和20年7月ごろに、IBMを解約すると言ってきたが、それを引き取ると言ったのが、工場がやられた住金の桜島伸銅所でした。

あとでわかったのですが、武田薬品は6代目長兵衛さんが社長をやっていたのですが、IBM資産がなにかにやられたら補償などで面倒なことになるというので返したことがわかりました。

その機械を堺筋の松坂屋百貨店の空いているところに入れることになりましたが、機械は直流で動くものだったので整流器がないと動かないのですが、入れたらレンタルを頂きますという条件でした。その時、エレベーターを動かす者がいなくて、生まれてはじめて1トンもある機械をエレベーターに積んで動かした経験があります。

敗戦の8月15日までは、松坂屋百貨店に設置してある機械は住友伸銅所のIBMの機械でした。戦争に負けたらどうなると思います？

しばらくしたら、武田製薬から機械を返して欲しいと言ってきた。もう戦争は終わった、住金は機械を止めたままだと、(武田)長兵衛さん直々の申し入れだった。さすが大阪のオーナー経営者だけのことはあります。

もうひとつ戦争中の出来事で、昭和 20 年 8 月 15 日の終戦の少し前、13日か14日に、今はきれいな公園になっていますが、森ノ宮に大阪造兵廠というのがあって、すべて陸軍の兵器工場だったのですが、そこに爆弾が落とされた。造兵廠のすぐそばの京橋にあった京阪デパートに IBM の機械がありましたが、これは日本統計機のものではなく、日本がフィリッピンを占領した時にマッカサー司令部にあったものを、ごっそり軍艦で持ち帰ったもので、大阪造兵廠の軍の計算に使っていて、405(会計機)などがありました。

そこから部品がないのでくれないかなどの要請がありましたが、1銭もお金が入らないのに貴重な部品などはあげるわけにはいかなかったが、軍の要請ということでしぶしぶ少しずつあげたということもありました。

大阪造兵廠には永井中尉、鎌田伍長がいましたが、ずっと後に日本 IBM がスタートしてから、鎌田さんは GHQ に勤務した後、IBM に入社された。入社された時は技術課長だったと思うが、その時の技術部長は・(カタチ)時男さんであった。そこへ永井元中尉が鎌田さんの部下で入ってくるということもありました。

なんだかんだとお話をしているうちに持ち時間もあと3分となりました。

今日、与えられたテーマは日本 IBM のはじめ、1950年のスタート、その前の段階云々ということですが、今よりは記憶に残っている頃に書いたものをお配りしたので、それでご容赦頂いて、もう少しの残り時間を頂きます。

8月15日は日本生命の屋上で、勝ったという人や負けたという人も一緒になって天皇陛下の放送を聞きました。その翌日、まだ学生なので神戸大学へ行って、H 教授の訓示を聞くことになりましたが、H 教授は、戦争中は、大政翼賛会云々やヒットラーと会ったなどと勲章をぶら下げてラッパを吹いていたのが、8月16日には言うことは全く違い、「みなさん、やっと私たちの時代がきました。これから、IBM の機械を使って国家の再建のために働いてください」と、よく言ったものだと思う。

しかし、これには理由がありました。

日本は占領されるが、米国占領軍は 東京(第 8 軍)と京都(第 6 軍)に司令部が置かれました。京都の大建ビル、今もあるかも知れませんが四条烏丸にあった丸紅のビルを接收して、20 年 9 月末頃に、ビルの横に大きなトレーラーを数台置いて、その中に IBM の機械が 1 セットずつ据えつけられていました。

そこへ行ってメンテナンスせよと言う指令を受けました。

トレーラーを開けたら、整流器もついた IBM の機械が 1 セットありました。

その時、生まれてはじめてマークセンサーを見ました。今でこそ珍しくもないが、米軍は戦地のどこでもパンチカードにマークセンサーとテレックスをトレーラーで引っ張って行って戦場のどこへでも移動し情報管理をしていた米軍に驚嘆し、これでは負けたと思いました。

その後 5 年後 日本 IBM が戦後再発足の年に朝鮮戦争が勃発し、緒戦で米軍が朝鮮半島で追われた時、機密事項の理由でトレーラーに設置された多くの IBM 機械が焼き捨てられ喪失した為、日本のお客様向け機械が納期遅延し、カスタマーへの対応に苦慮した事を今思い出しました。

カードを見てハッと思いました。日本は1銭5厘のはがきで大学教授であろうと医者であろうとみな新兵さんとして召集されていましたが、ところが進駐軍は違った。

パーソナルヒストリーがカードに収録され、それにはその人の任官の時の肩書が入っている。後に日本IBMがスタートした時の初代の社長になったデッカーという人は米軍伍長でしたが、佐官待遇くらいでした。

大建ビルに行った時に、IBMの元社員は中尉くらいでしたが、言葉がわからないままに機械を直したら喜んでくれるので仲良くなったということもありました。

ところがマークセンサーもマニュアルや配線図をみたら大体わかるので、この配線図をこの男から借りて家に持って帰ろうとしたら、出口で黒人のでっかいMPに立ちふさがれてあれこれ言っていたら、その将校がやってきて、この人は僕の友達だと言ってくれて難を逃れたこともありました。

いろいろなこともありましたが、進駐軍には時々頼まれて行くこともありましたが、唯一よかったのは腕章をくれたことでした。戦後すぐは乗り物に乗るのは大変ですが、この腕章があるとフリーパスでした。

一番いいのは、ヤミ米を持っていても進駐軍と思っているので、大分こっちの方は、ただでサービスしたけれど、腕章分で大体その時のサラリーくらいはありました。

ちょうどお時間になりましたのでこの辺で終わります。

【Note】

- *1～*4は別紙
- N 常務：西岡常務 日本統計機株式会社 常務（東芝からの出向者）
H 教授：平井泰太郎神戸商業大学教授 経営機械化研究所 所長
戦後は神戸大学教授 経済経営研究所 所長

文：西野信夫

校正・監修：水田眞一

11日午後2時46分に襲った東日本大震災。わずか4分後に、日本IBMで対策が開始した。1時間で被災地を含む全拠点の状況をほぼ把握。一夜明けた12日には救援物資の補給体制を確保し、被災した顧客への対応を始めた。何が素早い動きを可能にしたのか。

■明文化された手順
「責任者は状況と社員の安否を速やかに報告するよつに」。騒然とした警報が収まらない2時50分、日本IBMで保守部門の遠隔会議システムが動き出した。東京都中央区の本社と被災した仙台事業所を含む全国の拠点を結び、状況を確認するためだ。

同社が地方に置く事業所はほぼすべて、情報システムなどのアフターサービスを担当する保守拠点。災害時の地方拠点の状況把握は保守部門が中心になるとあらかじめ決められている。明文化された手順を基に訓練を繰り返しているため、いざという時に一人ひとりがやるべきことを熟知している。災害が発生すると半ば自動的に状況確認が始まる仕組みだ。

本社の別のフロアでは、災害対応で全権を持つ

大震災 企業はどう動いた

事業部の執行役員、部長クラス約30人を専用の対策室に集めた。

■専門家集団が事務局
担当者との連絡や課題の洗い出しなど対策本部の事務局を務めたのがリスクマネジメント・オフ

対策本部には外からも遠隔会議システムで参加できる。11日に福井県に出張中だった社長の橋本孝之(56)もその一人。緊急帰京の手段を探ったが断念。金沢市内に移動し、社内ネットワーク経由で会議に参加した。それまでの間も、対策本部は善々と手を打っていた。早い段階で「燃るまでは一切の決断を任せ

き、レンタルカーなどで生活物資や補修部品を供給する体制を整えた。すぐ被災地で顧客対応を開始。15日時点までにシステムの再起動や装置の修復など100件の対応を完了できたという。

■クラウドサービス無償提供 13日、週末返上でクラウド・コンピューティング事業担当執行役員の古崎敏文(49)が対策本部にアイデアを持ち込む。被災した自治体や救援活動を担う非営利団体がコンピューターの機能を使えるようクラウドサービスを提供する。というものだ。

「アイデアは部下から上がってきた。何かできることはないかと考えた結果」と古崎は話す。電力供給や余震の不安がない米田に置いたコンピュ

発生4分後に遠隔会議

日本IBM



東京から届いた救援物資のコモを運ぶ日本IBM仙台事業所の社員

被災地含む全拠点
1時間で状況把握

「と橋本が下野に権限を委ねていたからだ。実際、その後の動きも速かった。保守部門は12日には日本海回りや仙台市に到達するルートを確認。新拠に中継拠点を置

「アイデアは部下から上がってきた。何かできることはないかと考えた結果」と古崎は話す。電力供給や余震の不安がない米田に置いたコンピュ

社長の橋本は満席が続く航空機をあきらめ、陸路東京へ向かった。本社に到着したのは12日の昼過ぎだった。社員全員の無事と対策の進捗よく状況を確認すると、その足で首都圏にある2つの事業所を訪問。震災対応に取り組む社員を激励したという。

■敬称略 (随時掲載)

西日本地区 船出の前後

水田 真一

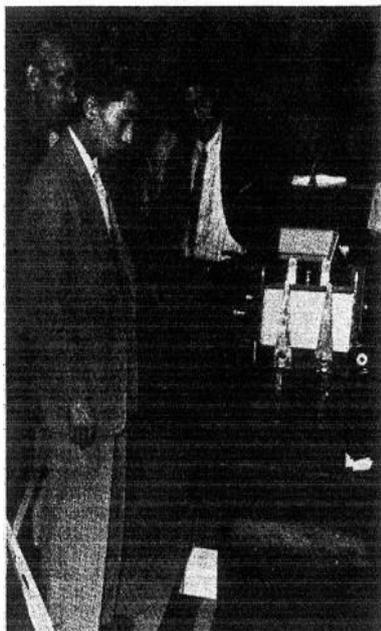
西日本地区部

昭和25年4月1日入社



私がこの会社に入社した頃（昭和20年2月）は、十数名の社員がいたが、戦後のインフレのなかで、戦前からのPCSレンタル

収入で細々と営業する会社に嫌気がさしたのか、私より以前の社員がゼロになった時もあった。慌てて人集めをし、何とか切り抜けられると思った矢先、モラトリアムで預金凍結の憂目に会い、ひととき、カスタマーからのレンタル収入が遅



昭和25年3月～6月まで行われたアメリカ博でのデモを行う水田さん

延し、これに起因して、給料が一月遅配した。集めた数名の社員を一人ずつ自宅に呼び乏しい白米を母に炊かせての説得も効かず、パタパタやめられた時は、泣くに泣けない毎日であった。

戦後数年を待たず井上富雄氏（現常務取締役）、原田義雄氏（現野洲工場 プラント・エンジニアリング）、岡田誠之輔氏（現DP技技部 技術企画 CEメジャメント&コントロール）、野上貞女嬢と、新進気鋭の人々を迎え、大阪出張所の体制建て直しができたのである。

当時、日生高麗橋ビル3階にあった25平米の事務所には、「日本統計機械株式会社大阪出張所」と書かれた木製の看板がかかげられていた。昭和25年3月31日、この看板の裏を削って「日本インターナショナル・ビジネス・マシンス株式会社大阪出張所」という3行にわたる長い名称を書いてもらった。この看板を看板屋から持ち帰り、当日は表側の元の名称の方を掛けた。

明けて4月1日朝、前日書かせた看板を裏がえして、業務再開のオープンをした。

私が日本統計機に入社した当時のお客様は、日本生命、武田薬品、住友生命、塩野義製薬の戦前からの4社であったが、23年、24年の間に大阪市役所、住友銀行、繊維公団の3社が加わり、それに名古屋の日本陶器を入れて、業務再開時の客先は8社であった。出張所員は、前述の5名に新卒第一号、金ボタン姿の野上秋生氏（現DP西日本技術部 人事）が加わり、総勢6名の精鋭が、大井川以西の西日本地区を担当する大阪出張所船出の陣取りであった。

昭和25年といえはまだ占領下の日本で漸く経済復興の光が見えだした頃である。この年、戦後初めての博覧会「アメリカ博」が、西宮球場で3月から6月まで開催

されたのである。業務再開2か月前の2月、肌寒い時、3S（タイプ285）数字式会計機、516会計複写穿孔機、511集団複写穿孔機などによるIBMパンチ・カード・システム 1セットを据え付け会期中の4か月間連日デモンストレーションを行った。

占領下の我国で、ドルは乏しく、輸入許可はほとんど不可能な時であったが、主催者の一つである朝日新聞の援助もあって、特に許されて405型会計機1台の輸入許可がおりた。この機械は、会期中に間に合わず、その年の秋に塩野義製薬に納入されたが、戦後の輸入第一号機であったと記憶している。

このような訳で、前述の機械は、ジャンク・マシン（スクラップ直前の機械）から部品を寄せ集めて、やっと組立てられた正にオンポロ・マシンであった。しかし、このデモによって業務再開第一号の新しいお客さま、カネボー受注の糸口を作ったことは、大きな成果であった。

当時、私はセールス、CE、カスタマー教育、CE教育、事業所管理など一人5役の役柄であり、博覧会には日曜日以外の夜中に機械を修理するのが精一杯であった。そこで一計を案じたのが、最大のお客さま、日本生命の力を借りることと、申し訳なかったが、まだまだ戦力とならない野上秋生氏に、デモのセリフを暗記させて、デモンストレーターに仕立てることであった。日生さんには、本当に、お世話になったものである。今は故人となられた平島三九馬氏（当時計算課長）、そして亀岡大助氏、小林三郎氏（共に今日、日生コンピュータ役員）等のかたがたが、交替でデモンストレーターになって下さった。また、カードまでも日生さんからいただいて、やっとこの期間を過ごせたのである。当時を想い今もこれらのかたがたに感謝している次第である。

資料 3



25年に

大阪進出

名古屋、福岡は28年



西の砦

船場、堂島といえば、古くから大阪商人の町として広く知られる。その町で、最近、日本IBMの商法がよく話題になる、と伝えられる。

「お客さんが儲からなんだらうちらも儲からへん。なんや、IBMはんのレンタル商売も考え方は同じやないか・・・」

大阪事業所の営業マンが、この町にカスタマー・コールに出かけると必ずといってよいほど、異常のやりとりが聞かれる。同社の西日本地区での活躍が、すっかり根を張りつめたことを物語るエピソードである。それだけに、西日本地区部長兼大阪事業所長の水田眞一も感慨無量という。いまにして思えば、よく今日まで発展したものである一と。

日本アイ・ビー・エムの大阪進出は戦後、25年4月のことである。戦時中、敵産管理と凍結されていた財産の返還を受け、新たに同社の前身である日本インターナショナル・ビジネス・マシーニズとして出発したその年に、大阪出張所が設けられた。

この時、開設に参画したメンバーは6人。そのなかに、水田の顔も見られた。

「当時、日生高麗橋ビル3階にあった日本統計機の事務所を、そのまま受け継ぎオープンしました。事務所といっても、わずか25平方メートルといった規模。

看板ひとつ、新しくつくるというのではなく、それまでのものを裏に返して、新社名を書くと言った具合でした」

仕事の方は、ひっそりとオープンした模様とは打って変わり結構、多忙であった。というのも、日本統計機時代からの顧客である日本生命、武田薬品、住友生命、塩野義製薬といった大企業が、そのまま契約を継続してくれたこと。

加えて、戦後いち早く、統計機を導入してくれたカスタマーが大阪に多かったなどの理由があげられる。23年に大阪市役所が、翌24年には繊維公団と住友銀行が、いずれも、その分野で最初に統計機を持ち新会社設立後の同社とも契約を結んでくれたのである。しかも、名古屋にある日本陶器のメンテナンスもおこなう必要があり、仕事は繁昌していた。

大阪進出に先立ち、統計機のデモンストレーションがおこなわれたのは業務再開直前のこと。西宮球場で開かれたアメリカ博へ、IBMパンチ・カード・システム一式を持ち込み大々的にPR。でも要員には、ある客先の社員も加わり協力してくれる。

この時の神話である。博覧会展示向けに輸入される船便の関係から、会期中に間に合わないことがわかり、あわてて戦前からあったスクラップ直前の機械を整備し、辛うじて出展にこぎつけた。

博覧会が終わって3ヶ月後に、ようやく到着した機械は塩野義製薬へ納入する。戦後「最初の輸入機」であった。

外貨割り当ての厳しい時代である。統計機輸入など、とても考えられない時であり、それだけにこの輸入はケガの功名であった。

こうしたなかで、デモを契機に鐘紡共契約を結ぶ。大阪出張所が本格的に開拓したカスタマー第一号である。

比較的恵まれた条件のなかで、スタート切った大阪出張所は続いて、そのランチともいえる名古屋、福岡の両出張所を28年に開設する。ここに、西日本地区における拠点を確立、営業、サービスのネットを網羅した。

——時は流れて現在、日本アイ・ビー・エムの西日本地区の活躍は、目を見張るばかりだ。

昨年5月に完工した日本アイ・ビー・エム大阪ビルは、その活躍ぶりを現わす象徴として見ても決して間違いではない。

「むろん、フィールド・オフィスとしての自社ビルは、わが社最初のものです」(水田)

大阪・靱公園の南・四ツ橋筋に、地上12階地下4回建てを誇るこのビルは、文字通り現代技術の粋がこらされている。コンピュータなどから発生する余熱や外気の熱を回収し暖房を試みるヒートポンプ・ユニット方式。電子計算機を使って、常に適切な設備機器の運転や制御をする総合管理方式など、他のビルに類を見ない多くのシステムが確立されている。

ビルに、こうした多くの機能を持たせたのも顧客第一主義の現れ。つまり、カスタマーとの対話の場所提供が、フィールド・オフィスの役割であるとの理念にもとづき設計されている。

顧客第一を考え商う大阪商人。彼らの中で、日本アイ・ビー・エムの商法が話題となるのも、この一つの事例をもってしてもうなずけるではないか。

電算機で

儲けは・・・

関西では理論より実際

自力本願

商売の街といわれる大阪。そこには他の地域には見られない気質が存在する、と西日本地区部長兼大阪事業所長の水田は説く。

「関西の産業界は在野精神が実に旺盛。日本の商いは大阪という意識が強く、あくまで商いの街として発展させることを生き甲斐としている経営者が多いのですよ」

こうした関西産業界の一貫した姿勢は日本アイ・ビー・エムの商売面にも、色々な形で顕在化する。たとえばパイオニア精神。

25年に、大阪出張所が開設されて以来、この地で働いてきた水田はいままでに進取の気性に満ちた人々の行動を体験してきた。戦後いち早く、統計機を導入した住友銀行は銀行界としても最初の採用であった。同じく、大阪市役所としても、その導入は全国の地方公共団体に先駆けたものである。

大阪証券取引所の統計機使用も、我が国の証券業界としては初めてのケース。

昭和26年後半から、証券市場に到来した「静かなるブーム」は、ついに奔流が堰を切って流れ出た。翌年5月の事である。

この事態をいち早く察知した取引所幹部は、米国証券界を視察し27年には清算業務の機械化を決定した。大阪証券取引所十年史を見ると、その経過とともに同取引所の進取の気性を随所に垣間見ることができる。

関西電力の料金徴収制度に、パンチ・カード・システムの採用が決定されたのもこの年だ。

この時のエピソードである新制度の採用により、関電では徴収証一枚につき用紙代一厘のコストアップとなる。その事情を関電マンが「機会を使うたら一厘アップや・・・」と、もったいなそうに水谷話したという。いかにも、大阪らしい発言ではないか。

関西での商売は、現実の商売に立脚したものでなくてはならないと彼が説くのも、こうした事情からだ。理論より実際。平たく言えばソロバン勘定に合うことだ。こんな話がある。

大阪で、カスタマー・コールを訪れると顧客は必ずこう問うという。

「高価なコンピュータを入れて、いったい

どのくらい儲かるのや」と。

オーナーシップも、関西産業界の持つ大きな特徴だ。企業活動を遂行するにあたり、実に情勢に対する反応が早い。ブレーキをいち早くかけ、かつ、立ち上がりは敏速だ。

こうした関西産業界の行動力は、他人に頼ることを決しとしない「自力本願」の精神があるからだ。水田はいう。関西を代表する企業群の多くは、創業者が、またはそうした気質を持つ人物をトップとしている。

純然たるサラリーマン経営者は少ない。企業がつぶれたら家もつぶれるといった状況であるだけに慎重であり、また機を見るに敏といえよう。松下電器へ統計機が導入された30年の話である。

ある日、突然、松下から「明日にも統計機を収めてくれ」との話が持ち込まれた。大阪営業所としてはかねてから当社と商談を進めていたが、これほど早急に話がまとまるものとは思っていなかった。まさに電光石火である。

そのための準備をなにひとつしていなかったところから、大阪営業所が躊躇していると松下の担当社員がこう話したという。

「あなたの会社は **THINK** がモットーのはず。だったら、考えればなんとかなるのでは・・・」

立ち上がりは迅速といった関西産業界の特質を、いかにも物語るエピソードではないか。こうした、関西産業界の気質の中で育った水田は25年にわたって同社の西日本地域を主に今日の活躍している。

「わしはコンピュータのオッサンや・・・」と、自らをこう紹介する。いかにも水田の発言らしい。

しかし、彼の人柄は関西財界では知らぬ人がいないほど、顔が広いのだ。商売の街・大阪で仕事をする水田も、また根っからの商売人である。



資料4

私とIBMとの出会いは、神戸商業大学平井泰太郎教授より、日本統計機(株)へ委託生として出社を命じられたことにはじまる。

昭和二十年二月十一日紀元節(建国記念日)、日本生命本社新館六階機械室の隣室ガラス張りのオフィス、同社大阪出張所へ出社、日生の機械を眺めながら、新進気鋭の経験学生として先輩に紹介される。(神戸商大を中心に阪大工学部、山口、神戸、彦根、各高商教授陣と元日本ワットソン統計会計機械社員、その他産・官・学・軍の講師による一カ年の特訓を

私の歩み

「50周年によせて」

日本アイ・ビー・エム50年の歴史は、そこに働く個人の歴史でもある。長年にわたり会社とともに歩んでこられた5人の方々に自らの貴重な体験、エピソードの数々と、IBMの歩みを重ね合わせて寄稿いただいた。

受けた学生として——これらの方々とのご縁は、その後継者も含め、今日まで、厚誼に与り感謝している)

空襲の中で補修の毎日

当時、西日本(六〇サイクル地域)のお客さまは六社。名古屋の日本陶器、大阪の日本生命、武田薬品(大阪工場)、住友生命(住友本社)——現住友銀行本店ビル) 住友金属伸銅所(桜島)であった。

戦況は厳しく、空襲警報のたびに、地下室に

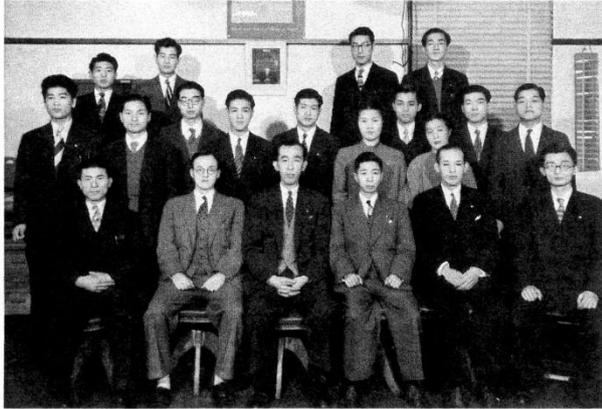


避難しながらの勤務で、仕事はサービスマン(機械の補修を主体にオペレーションの指導、システム設計、セールスとワイールド業務全般)。実務経験ゼロの若造がベテランとのふれこみで仕事をするので、わからない故障は、お客さまの社員が帰社後、徹夜でマニュアルと首つ引き。朝まで自学自習を兼ねた補修の毎日で、たちまち各社の守衛さんと顔なじみとなり、また、お客さまのオペレーターが翌朝出社すると、機械が使用できる状態になっており、一応ベテランの「のれん」作りにまず

西日本のお客さまよむに

西日本営業統括本部

水田 眞一



昭和29年大阪出張所にて。前列右から3人目が水田さん

成功というところ。

この間、六甲台の大学に、週一、二度レポ
ート提出を兼ねて息抜きを試みたが、これも
だんだん難しくなった。

出社一カ月後の三月十三日の夜、大阪は大
空襲で焼け野原となる。翌十四日、早朝よりゲ
ートル鉄兜に身を固め、客先五社を巡回、住
友伸銅所を除く四社は無事で一安心。住友本
社ビルの屋上にあつた住生機械室から見る大
阪市内は、各所に煙立ちこめ惨憺たるもので
あつた。

八月十五日終戦の玉音放送を、日生本社で
日生社員とともに聞き、翌日、大学で平井教
授より「習得した技術をもって日本の復興に
資す」との訓示をつける。

終戦間もなく、日生、住生の建物は進駐軍に
接収され、日生は隣の旧館へ、住生は一時近
くの小学校へと、それぞれ機械の移転作業を、
お客さまとともに涙ながらに行つたのも終戦
余談である。

初のユーザー団体が発足

戦後は混乱とインフレ。レンタルで収入を
得ていた当時の会社は、他業種のように現物
給与の物もなくいろいろと困難な場面もあり、
二〜三年の間に社員が減る。気がついた時は、
私が新人の採用や即席教育を受けもつという
状況で、お客さまの部長の方が見るに見
かねて、若輩の私を指導・援助くださったとい
う、お客さまとの良い協力体制が自然とでき
た。

昭和二十三年、お客さまの助け合い運動の
一環として、わが国初のユーザー団体「関西
統計機研究会」（IBM研究会の前身）が発足
したのも、このよつな必然性からで、爾来私
は今日までその事務局を仰せつかつてきた。

ユーザーの数を増やすことが、サービスの
向上につながり、業務再開までの基礎固め
になると、お客さまに教えられ助けられて、
いずれも本邦初のインダストリー、大阪銀行
（現住友銀行）、大阪市役所、繊維団体の三社
に受注納入。在阪七社、名古屋の日本陶器を
含め、八社のお客さまをもって、西日本の
IBMは、昭和二十五年四月一日、日本イン
ターナショナル・ビジネス・マシーンス（株）
として正式に業務を再開した。

日本再建に寄与した誇り

この直前、昭和二十五年三月、アメリカ博覧
会が西宮球場で開催された。会社再開前であ
つたが、当社はパンチカード・システム・セ
ットを出展、鐘紡、神戸市、大阪証券取引所、
関西電力等、いずれも業界初の新規受注のき
っかけができた。

アメリカ博覧会、戦時中閉鎖された世界の情
報を求めて、全国から観客が集まり、当初三
カ月の予定が六カ月に延長され、盛況をてい
した。このため、大阪出張所員六名が、現業
のかたわら博覧会を支えることは到底できず、
日本生命から全面的なご支援をいただき、デ
モンストレーターから電源設備まで、一切の
ご協力をいただいた。配布資料の中に『最大
最優』をキャッチフレーズとする日生PRが
あり、関西商法を学んだものである。

終戦から戦後IBM再開までの五年および
再開からの十年、すなわち、一九四五年から一
九五〇年代の十五年間は、その時どきの基幹産
業のシステム化を通じ、お客さまとともに日
本の再建に、日本アイ・ビー・エムが寄与し
たことを誇りに思う。この間、各業界第一号
のお客さまの多くが、西日本地区で見られる
のも、わが国産業構造の変遷とともに、何か
を物語るものがあるように思う。

年代順に見ると、大阪市（自治体）、住友銀
行（銀行）、鐘紡（繊維）、八幡製鉄（鉄）、三井
三池（石炭）、大阪証券取引所（証券）、フクス
ケ（パレル）、久保田鉄工（農機具・鉄管）、
関西電力（公益事業）、新三菱重工（船・現三菱
重工神戸造船所）、マツダ（車）、松下電器（家
電）、住友電工（電線）、住友化学（化学）等。

I B Mと共に 第2回 1952年から1971年までを振り返って

2012年4月21日（土）親鴨会関西支部総会－水田眞一氏 第2回講演内容

昨年の総会で、日本 IBM が誕生する頃から私が定年退職するまでの出来事を話してくれということでお話しし、私自身、もう充分話し終わったかと思っていましたら、続きを話せと言うことになりまして、今回はそのお話しする証拠を残そうと今から資料をお渡ししますが、日本アイ・ビー・エムが1950年に発足してから今日まで、東京本社、カード工場、大阪出張所の3ヶ所のロケーションがありました、その中で西日本のロケーションがどうなっていたかお配りした6枚のシートに記されています。

1950年から1988年までをリストアップしています。1971年以降はIBM手帳に書かれてあるのを使いましたが、それ以前のは資料がなかったので、私の記憶にある限り記したものです。昨夕の5時頃にやっとのことで出来上がったものです。

IBM ができて、昨年丁度100年、1世紀にわたる企業コーポレーションでは、この度、初めて女性の CEO が誕生しました。2012年1月1日からパルミサーノ会長からバージニア・ロメッティ会長(女性)にバトンタッチされました。

つい最近の3月の終わり頃、日本 IBM の社長が日本人以外の人、ドイツ人のマーティンイェッターが社長になりました。

この2つは大きな人事ニュースでありましたが、IBM-J では1950年チャールズ デッカーさんが初代社長でありました。古い人はよくご存知かと思いますが、アメリカ人と言っても日本人みたいな人で、戦前のカスタマー人間でもありました。私もお世話になったし、よく一緒に遊んだ仲ですが、のちには日本の奥さんをもらって永住に近い日本での生活をしていました。56年前のアメリカ人の社長と言えばそうでしたが、ずっと今日まで水品さんからはじまって橋本さんまでの間、大体7代くらいは日本人の社長でした。

日本 IBM、IBMコーポレートにとっても、2012年と言う年は大きなチェンジの年でした。たまたまIBM全体の会社のあり方などが日経新聞に載っていましたが、最近ではIBMの話題が毎日のように日経新聞に出ています。IBMコーポレートは大きなチェンジをしながら大変優れた経営をしているという外の評価というかニュースが出ています。新聞を見る限り喜んでる次第です。

お配りした6枚のシートはIBMの施設関連の歴史を綴ったものですが、その最初にアーサー・K・ワトソン初来日とありますが、1952年、昭和27年にIBMジャパンとしてはじめてIBM創業者であるワトソン一族である息子さんでアーサー・K・ワトソンがやってきます。私もお迎えしましたが、大変ハンサムな40歳前の人でしたが、モリソンという男性の秘書を連れていました。この秘書は素晴らしい方でした。

この2人がカスタマー トップコールをするということになりましたが、これがその事業所の責任者のエバレーションになっていました。トップコールする時に、たとえば日本生命さん

に行ったら当時は弘世 現(ひろせげん)社長に、カネボウでは武藤さんに会うかどうかが I B M のカスタマーに対するペネトレーション、よく使いましたね、日本語で言えば浸透度、お客様といかにトップリレーションが出来ているか、I B M の商売と言うのは昔から、今でもそうだと思いますがトップダウンで商売するということになっています。

アーサー・Kワトソンがモリソンと2人でお客様をコールする時は、デッカーが日本 I B M の社長で、水品さんが常務でしたが、彼らの車に乗らないのです。デッカー、水品さんらは別の車で後ろからついていくのです。大阪は君がやってるのだからと言われたが、私は英語が全然わからないのですが、AKワトソン、モリソンの2人は私にわかる英語で話してくれて、私が答えている日本語的な英語に対してわかるまでしつこく聞いてくるのです。

AKワトソンがそれから2年後に来た時ランチを訪問することになり、大阪営業所は日生大阪支社の5階に引っ越した時でしたが、大阪営業所に来られて一緒に社員全員と写真を撮ったことがあり、ワールドトレードのニュースにも出たくらいです。

AKワトソンが地方の1ランチに来たことは、その後の日本 I B M の歴史から見てもあまりなかったことなので、大阪で出張所時代、営業所時代から勤務したことのある方には、ひとつの誇りとして頂きたいとの思いからこんな話をさせて頂きました。

1952年にAKワトソンが来た日に出張所から日本初の営業所に昇格しましたが、営業所に昇格すると、サラリーも少し変わるのです。その点ではAKワトソンには感謝しています。

(笑)

私事ですがAKワトソンが帰った1ヶ月以内に結婚式を迎えていました。今の嫁さんと。そのこともAKワトソンが知った上で、当時の新大阪ホテル(現ロイヤルホテル系)での日本生命とかカネボウとかのお客様トップを招いての食事会に、どのレベルの人がくるかと言うのを見ているわけで、この結果、出張所じゃなくて営業所にしてやろうと言うことになったと思います。(14:35)

それから2年経ちまして、それまでは本社営業と大阪出張所しかありませんでした。

日本の電力事情が富士川から西が60サイクル、東が50サイクルとなっていて、当時のI B M の機械は50サイクルと60サイクルに分かれていたので、サイクルを合わすためにサイクルコンバーターが必要で、これはお客様に負担してもらうことになっていました。富士川から西は私が担当していましたが1954年に、福岡出張所と名古屋出張所ができて大阪からのれん分けとなりました。福岡は谷崎さん、名古屋は後に副社長になられた濱口さん、この2人がそれぞれの出張所長になり、福井県と三重県から東の富士川までは濱口さん、小郡から西は谷崎さんということになりましたが、これは1954年のことでした。

1959年にみなさんもお存知かと思いますが、伊藤和郎さんが広島出張所ができて初代所長になりましたが、彼は入社して福岡の営業所に配置されたのですが、鹿児島島人で鹿児島では名家の出身でもありますが、伊藤さんが入社して結婚した直後に、単独で商売するには奥さんがいる方が何かといいだろうということで広島の駐在員として赴任してもらいました。駅頭に迎えに行きましたら、さち子夫人とふたりでやってこられ、二人を連れて、当時広島の上で比治山に登りました。余談ですが、比治山にはA B C C (Atomic Bomb Casualty Commission 原爆傷害調査委員会) という建物に1401があって、コーポレートのお客さ

んでIBM Jのお客さんではなかったのですが。

その山に登ると広島市内が一望でき、伊藤夫妻にこれがあなたたちの城下になりますよ、この下の大きなビルを全部お客さんにして頂戴ねって言いました。

それから後の1959年に伊藤さんが広島で最初にオフィスを作るまでは、今では新幹線で大阪から広島まではあっという間に行けますが、当時は夜行列車で行かねばならず、夜11時頃に乘って到着いて、トルコ風呂みたいなところで入浴して、それからお客さんを回るということをしていましたが、広島にオフィスができてからは、今から思うと朝早くから伊藤さんの新婚夫婦の家に行って迷惑だったのではと思っていますが、奥さんが朝ごはんを作ってくれたりしてくれました。

そういうこともあり、伊藤さんは2012年4月14日に逝去されましたが、丁度今頃の時間にお葬式がありましたので、ここでご冥福をお祈りして黙とうしたいと思います。そのまま結構ですので、黙とう。・・・ありがとうございました。(20:33)

1960年にカード工場を造ったとか、その他71年までのランチ関係はお配りした「思い出すままの追憶」に書かれたようにでき、そして1970年丁度千里の万博に皆さんもご存知のようにIBMパビリオンがあり、ワトソンジュニアやA・Kワトソンなど当時のコーポレートのこれと言う人は来てくれました。ワトソンは専用ジェットで来たのですよ。ワトソンジュニアはパイロットだったのですね。彼は後にソビエトの大使になりました。A・Kワトソンはフランス大使になっています。この2つは創業者のシニアワトソンの夢だったらしいのです。アメリカ人と言うのはどこかの大国の大使になるのが夢らしいのです。それともう一つは国内では国際会議所のティアマンになることだった。この両方ともA・Kワトソンは夢を果たした人です。

このあたりで約20分お話ししましたが、お配りした資料を見て頂いて、みなさんが自分はこの時期に高松営業所にいた頃だったな、福岡にいたなって、この資料を見て頂きながら思い出の一つになればと思ったのがこの資料です。

Expo70がクローズアップした時に入社して営業で頑張ってもらって、この3月31日までIBMの特別顧問として、またトップマネジメントして活躍して頂いた金田 治さんが、この大阪の親鴨会に初登場、ひとつ金田さんにバトンタッチして私のもち時間の40分を好きなようにお話しして頂きたくと思います。

(25:27)

添付資料：日本アイ・ビー・エム 西日本施設の推移

文：西野信夫
校正・監修：水田真一



2002年10月21日結婚記念日（金婚式）写真